心の安寧（あんねい）を求めて

―チベット仏教の視点から―

マチウ・リカール/ラブジャム・リンポチェ

聞き手：佐多保彦　株式会社東機貿 代表取締役社長

左からマチウ・リカール師、ラブジャム・リンポチェ、佐多

佐多：ネパールのカトマンズ郊外にシェチェン診療所（＊）が開設されてから、すでに2年近くが経とうとしています。現在の状況はいかがですか。

マチウ：皆様のご協力のおかげで、開設当初から患者数は順調に伸びています。1日に100人近い患者が診察に訪れることもあります。私たちの診療所では、医療行為を行うだけでなく、全ての患者について人生相談を受けるなど精神的なケアまで行うことを心がけています。一般診療のほかにカウンセリングセクションを設け、長いときは半日もかけて患者の話を聴くこともあります。医師と患者の間によい人間関係を築き、まず患者に信頼してもらえる環境づくりを目指しているのです。

そのために、診療でもホリスティックなアプローチを心がけ、西洋医療やチベット医療などを組み合わせることによって、その患者にとって本当に必要な治療を総合的に判断することにしています。

最近では、インドなどのより貧しくなかなか診療を受けられない地域の患者のために、車を使った移動診療を始めました。

ラブジャム：カトマンズでは地震がとても多いのですが、去年も大地震が起こって40～50人の方が亡くなりました。そのような場合でも、地元住民と診療所が自然と協力体制をつくり、迅速な医療支援を行うことができました。

佐多：ダライ・ラマ猊下（げいか）のご意思もあって、チベット仏教は現在とても積極的に対外活動を行っていらっしゃいますね。アメリカの9.11事件についても、猊下が世界に向けて発信したメッセージは多くの人々の関心を集めました。

マチウ：ダライ・ラマ猊下は、人間が人間を殺傷するために爆弾を使うことが信じられないと、大変な衝撃を受けておられました。テロを起こした彼らは、何ヵ月もかけて作戦を練り、完璧に計画を成功させました。大変な知性の持ち主です。しかし、人の心から他人への思いやりや愛情といった気持ちが抜けてしまうと、人の知性は強力な武器となり得るのです。現代の教育は、私たちに高度な知識と情報をもたらしますが、人間のポジティブな資質を高めることには無関心です。

事件の後、猊下はブッシュ大統領に書簡を送られています。深い哀悼の意を表明するとともに、暴力的な行為で報復することについて慎重に考えて欲しいと述べておられます。暴力は暴力を生むだけで、決して解決方法にはなりません。

佐多：今回の事件は、私にとっても非常に象徴的な事件でした。広島や長崎では一体何人の方が亡くなられたと思いますか。アメリカは戦争という大義のもと、原爆投下については一度も日本に謝罪していません。戦争は日本が先に始めたのだから、アメリカは悪くないというわけです。仏教では憎しみを持つことは大変いけないことになっていますが、アメリカとの戦争で亡くなられた方々の憎しみ（怨霊（おんりょう））が9.11事件を招いてしまったのではないかと、自分が日本人のせいでしょうか、即座にそのような思いが浮かびました。

私たち日本人は、とても平和で穏やかな民族だと言われますが、心の底には戦争で負った大きな哀しみを秘めています。それが日本の実状ですが、アメリカはその日本に未だ広大な軍事基地を配置しています。その広さは、全体で東京都の約1.3倍にもなるそうです。

私個人としては、アメリカのよいところも理解していますし、色々な面で尊敬もしていますが、未だにアメリカと日本は対等な関係ではないと、最近では日米双方の鈍感さに危機感に近いものを感じています。

マチウ：ダライ・ラマ猊下も、今回の事件を引き起こした要因は、西欧の超大国が長い間多くの人々の絶望や不満の声に対して無関心であったことだとおっしゃっています。今回の事件を本当に解決しようとするのなら、彼らと対話をする努力をし、なぜ彼らはこのような事件を起こしたのか、憎しみはなぜ生まれたのかという根本的な問題を解決するよう努力しなくてはなりません。

旧ソ連がアフガニスタンに侵攻を開始したとき、世界はなにもしませんでした。彼らは見捨てられたと感じたことでしょう。世界の人々が、他人の苦しみや悲しみ、不安を顧みる心を持っていたならば、このような不幸な事件は起きなかったかもしれません。そして、アメリカがアフガニスタンを支援するために、彼らに武器を渡しました。国が復興するための支援をする代わりに、彼らに武器を渡したのです！そしてそれが結果的にアメリカを攻撃する武器となりました。西欧諸国は武器の取引に従事し、そしてその売買によって平和を成り立たせています。これは大きな矛盾です。ダライ・ラマ猊下のお考えの根幹にこうあります。「外的武装解除は、私たちの心から憎しみを追い

マチウ・リカール
パストゥール研究所にて理学博士号を取得後、元国立科学研究センター研究員の職を経た後、以前より私淑していたカンギュル・リンポチェのもとでチベット仏教の修行を積む。彼の死後、シェチェン僧院にてディルゴ・キェンツェ・リンポチェのもとで12年間学ぶ。89年からはダライ・ラマの通訳を務め、欧米各国を随行して回っている。父君は現代フランスを代表する哲学者ジャン=フランソワ・ルヴェル氏。父君との共著『僧侶と哲学者』はベストセラーとなっている。

ラブジャム・リンポチェ
リンポチェは最高位の僧を指す。初代ラブジャムから数えて6代目にあたる「生まれかわり」として承認され、現在はシェチェン僧院の僧院長を務める。祖父ディルゴ・キェンツェ・リンポチェは20世紀を代表する宗教指導者の1人であり、かつダライ・ラマの師でもあった。

（＊）2000年10月に、スイスと日本の篤志家の寄付を得て開設。

『僧侶と哲学者』
新評論　本体 3800円

出すという内的武装解除から始めなくてはならない」と。

ラブジャム：アメリカ人は、1人のアメリカ人兵士が亡くなっても大変嘆き悲しむのに、そのそばで多くの罪のない人々が何百人と亡くなっていることに対して無関心であることに驚いたことがあります。

佐多：以前人間の心の中には黄金があるということを伺いました。その黄金を見つけ出すことができれば、人はこのような争いを避けることができるのでしょうか。

ラブジャム：人はみな心の中に「仏性」というものを持っています。それを心の中の黄金と表現しています。煩悩というヴェールに覆われているために気づかないだけで、一人ひとりの人間が仏陀となる可能性、すなわち完全な解脱と悟りに達する可能性を秘めているのです。この黄金を発掘し磨きをかけることができれば、この世から多くの愚かな争いがなくなることでしょう。

佐多：人生は「自分探しの旅」のように思えます。一生をかけて「自分とはなにか」ということを見つける旅だと思うのですが。

マチウ：人がこの世で生きる意味を見出せなかったら、この世は非常に苦悩にあふれたものとなります。香港で講演を行ったときに、若い男性が「この世に自分の存在価値を見出せない」と相談にきました。高校進学、大学進学、そして就職と機械的に人生が進み、そして都会の日常は毎日同じことの繰り返しです。しかしそのような日常の中からこそ、生きる意味を積極的に引き出すことが大切なのです。

**　また、ある男性から、自分が本当にやりたいことが分からないために何度も職を変えていると相談を受けたこともあります。私は言いました。1日でも2日でもいいから静かな森にでも行き、余計なことはなにも考えずに、ただひたすら「自分が本当はなにがしたいのか」と考えてみなさいと。そうすれば、次の日の朝目覚めたときに自ずと答えが出てきます。有名になりたい、裕福になりたいという欲望に負けて、人は人生において本当に大切なものを見失いがちですが、名声や富といったものから得られるものがどれほどのものでしょうか。**

佐多：アメリカの徹底した資本主義のもとでは、一握りのグループを除いて雇用状況はとても不安定です。そのような中では、自然と人々の心もすさんでいきます。しかし、私自身のことを考えても、父親から会社を引き継ぎ、事業規模を拡大し、それに伴って悩みも深くなっていきます。もし私が僧院で生活することが許されたのならば、おそらく非常に意義深い生活が送れたのではないかと思います（笑）。しかし、社会はそれでは成り立ちません。アメリカの社会のシステムにも問題はあるものの、社会が成り立つためには必要なことも確かです。私は帰依しているからと、ただ社会から逃げてしまうわけにもいきません。実際、社会ほど厳しい修道院はないとも考えています。修道院では考えられないような誘惑がいたるところに存在しているのですから。もっとも、インターネットが発達した現代では、修道院も昔とは違うかもしれませんが（笑）。今後は、仏教を社会の中でどう活かしていくのか、それを実践していただきたいと期待しています。

マチウ：確かに、一般の方は家庭や仕事に縛られて僧院に引きこもったりすることはできません。しかし、仏教の考えは生活のどんなときにも役立ちます。修行僧というのは仏教の道のプロであるというだけで、ある意味では単なる形式に過ぎず、修行僧であれ一般信徒であれ、それぞれの道があるわけです。

佐多：例えば、死を考えたときにふつう人はとても不安になります。私が敬愛しておりました禅宗の故秋月龍珉老師に、あるとき母が「死んだらどうなるのでしょう」とお尋ねしたところ、「お母様、どうしてそんなことを今から心配されるのですか。そんなことは死んでから考えればよいのですよ」と笑ってお答えになりました。母があっけにとられていた様子が愉快でした。「今」、「ここ」、「自己」が大事と考える禅宗の極意でしょうか。

マチウ：アメリカである調査をしたところ、宗教に関係なく、強い信仰心を持っている人はそうでない人より平均7年長生きするという結果が出ました。信仰心を持っている人は、他の人々を助ける機会が多く、必然的に社会的つながりが強くなります。そして、死後も自分の人生が続いていくということを理解しているので、彼らの人生は常に希望に満ち、心が安定して健康になるのです。

**　仏教でも、死後に思いを馳せて不安になるのではなく、今この人生と真剣に向き合いなさいと説いています。死後の世界は今の人生の結果であり、現在ネガティブな生き方をしていると、次の人生も苦しみの多いものとなってしまいます。そして、意識は死後も続いていきます。死は単なる通過点に過ぎず、そこで終わりになってしまうということはありません。私たちはそのことを理解しているために、死後を思って不安になることはないのです。**